

公益社団法人 日本技術士会 男女共同参画推進委員会 第7回 DEI フォーラム 開催報告

1. 開催概要

- ・日時：2025年5月24日（土）14:00～16:30
- ・方法：対面・オンラインのハイブリッド形式
- ・主催：公益社団法人 日本技術士会 男女共同参画推進委員会
- ・後援：男女共同参画学協会連絡会
- ・参加者：47名（講師1名、男女共同参画推進委員会委員含む46名）
- ・テーマ：土木学会初の女性会長としての振り返りから見えてきた組織の改革に必要なこと
- ・プログラム：
 - 14:00 開会挨拶（小林副会長・飯島委員長）
 - 14:10 講演「土木の学会の長を経験して」（佐々木葉氏）
 - 14:40 質疑応答
 - 15:10 日本技術士会 DEI 推進宣言について
 - 15:20 グループディスカッション（参加者全員：4～5人のグループに分かれてディスカッション（説明：瀬尾 D&I 小委員長）
 - 16:05 グループ発表（全体共有）、講師コメント
 - 16:25 記念撮影、閉会挨拶（小牛田理事・副委員長）
- ・司会進行：古賀沙織委員

2. 内容

(1)開会挨拶 公益社団法人 日本技術士会 副会長 小林 政徳

女性の割合が何%とか非常に分かり易く目に飛び込んでくる数値がある。技術士の資格を取られた方はご自身にどれだけ希少価値があるのかをご理解いただければと思う。男女の割合は大体半分。男性は約6000万人で大卒の人は5割、その中で理系は3割強。理系の方は技術士の試験を受けやすい。毎年2万人が二次試験を受験し、合格は1割くらい。技術士の資格を持つ人はぐっと少ない。ご自身の部門と総合技術監理を持つ方はさらに少ない。是非みなさん誇りを持って頂きたい。男女の人数で言えば女性もほぼ同じ。活躍いただくことを期待している。



小林政徳 副会長

男女共同参画は変革期で、ステップアップしていくところ。名前も新たに作る動きがある。男女共同参画も舵を切ろうとしている。是非みなさんご支援をよろしくお願いします。

(2)趣旨説明 男女共同参画推進委員会 委員長 飯島 玲子

当委員会は2011年に発足し、14年になる。当初は女性支援がメインで、女子学生や女性技術者に技術士を取ってキャリアに役立てていただこうと技術サロンを立ち上げた。8年前にD&I小委員会を立ち上げ、男女だけでなく幅広く多様性を見ていく活動を展開している。その活動の中でフォーラムを年1回実施している。当初はD&Iにどんな意味があるのかという質問も多かったが、最近は職場でこんなことを実践しているという声も聞



飯島玲子 委員長

き、参加者の意識も変わってきたと実感している。

本日は土木学会で初の女性会長を担われている佐々木先生にお越しいただいた。日本技術士会は過去に女性の副会長（岩熊氏）がおられた。本会は女性が 3%と少ない。もっと女性が活躍できれば日本の科学技術の発達に役立てるのではないかと思います。来期、理事に女性が 3 名になる。今までは 2 名だったが、3 名で 9%となった。組織の意思決定層に影響を与えられるのはクリティカルマスといわれる。本会も女性 3 割を目指してはどうかと思う。

本会で DEI 推進宣言を出した。多様な人が活躍することが多様な人への科学技術のサービスを届けることにつながる。意思決定層、委員、幹部、それぞれの部門において女性が活躍できるような場にしたい。技術士は女性にまだまだ知られていない。理系が出来る女子は可愛くないと思われ、出来ても出来ない振りをし、本当に出来なくなるということが中高生の間で起きていると聞く。そういったアンコンシャス・バイアスも私たちの大きな課題だと思っている。本日は佐々木先生から土木学会での取り組みや課題を学ばせていただき、次につなげたい。

(3)講演「土木の学会の長を経験して」佐々木葉氏

講演者プロフィール

早稲田大学で建築、東京工業大学で景観を学び、2003 年より早稲田大学教授。土木学会では学会誌編集委員会、景観・デザイン委員会、D&I 委員会の委員長などを経験し、2024 年 6 月から第 112 代会長を務める。NPO 郡上八幡水の学校副理事長。博士（工学）。



佐々木葉氏（講師）

2024 年 6 月に土木学会会長となり、任期もあと 3 週間を切ったタイミングで土木学会に先んじて振り返る機会をいただいた。会長としてレアな属性であることは自由な活動の後押しとなった一方、初めて向き合うことも多く、終始走りながら考えてきた。土木という分野の個性、学会という組織の難しさ、そして長という立場の不安があったが、失敗しても天地がひっくり返ったり、会員が路頭に迷ったりすることはないと楽観的に直観的に走ってきた経験を振り返りたい。

1. 会長プロジェクト

土木界に限らず、世界には課題が山積みである。会員一人ひとりが互いを信頼し、自由に交流し、自らの世界を広げ、他者とつながる環境をつくることも一つのインフラと捉え、みんながそう思ったら土木学会の風景も変わるのではないかと思います。「土木学会の風景を描くプロジェクト」を企画した。「交流の風景」「広がる仕事の風景」「土木学会の DX」を柱に取組んでいる。

01 交流の風景プロジェクト：交流名刺

土木学会の会員は約 4 万人いるが、学会を身近に感じる人が少なく、学会活動も参加するだけとなっている。活動する楽しさを作っていきたいと思い、交流名刺を企画した。仕事の名刺とは別に土木学会員としての名刺を持って自由に交流できればと思う。

01 交流の風景プロジェクト：動画「クマジロウの教えてドボコン」

土木学会を知ってもらうため動画も作った。人が言うと角が立つこともぬいぐるみなら伝えられると考えた。

01 交流の風景プロジェクト：D&I行動宣言

土木学会は2015年にD&I行動宣言を出しているが、バージョンアップする必要があると思い、飯島さんにWGのリーダーになってもらい、Eを加えたDE&Iにバージョンアップした。認める⇒認め合う、活かす⇒発揮する、育てる⇒育つ、と、自らがという語感にし、当事者性を含んだインフラの作り方をしていこうということに言及した形とした。今年、土木学会 DEI 行動宣言として出すこととなった。

02 ひろがる仕事の風景プロジェクト：

土木の仕事は橋・ダム・トンネルなどのイメージが強い。もっとちがう広がりがあるのではないかと思い、仕事の風景探訪では、建設コンサルタントが酒蔵を再生するなど、ちがう広がりを具体的に伝えていくことにした。D&I カフェトークは数年前から行っており、土木の世界を一步進めるために、異分野の方との対談を行い、紹介している。会長編として少し長めに時間をとり、第1回は土木と結びつかない様な中性子とのつながりを公開している。それ以外にも理事にクォータ制を10年前から取り入れられている情報処理学会の話、農村計画学会とは学会の規模の違いによる気づき、経営トップのサンドラ・ウーさんとはDEIの重要性についての話を公開する予定である。

03 学会のDXプロジェクト：

Webサイトを見やすくする等にとりくんでいく。基盤システム取り替えは大変で、時間はかかるが進めている最中である。

2. 会長からのメッセージ

毎月発行している学会誌に会長からのメッセージを書いている。会員でなくてもwebから読むことが出来る。初めて会った人に感想をいただくこともある。

3. 八潮市での道路陥没事故発生を受けてのメッセージ

気持ちをときほぐし、気づききっかけをつくる。気分と雰囲気を変えることができればと思い、プロジェクトを進めてきた。その様な中、八潮市で道路陥没事故が起きた。会員が個別には活動していたが、学会として黙っていていいのかと思い、下水道に起因する道路陥没事故を受けての会員に対してメッセージを出した。土木学会ではメンテナンスの重要性の発信と技術の促進に取り組んできたが、事故が起きてしまった。そのことをどう受け止めたらいいのか、色んな観点から見直しが必要だと思った。

道路というインフラの地下には目に見えづらいが、複数のライフラインが身近なネットワークとして存在している。上下水道も地域の水循環の一部。維持に費用がかかるが仕組みが分かりづらい。幅広い「私たち」の理解と合意がなければ対策は進まない。インフラを使う私たちがインフラを「自分ごと」として考える社会を目指すには自分の領域を固定せず、直面する課題に一人一人が関心を持ち、対話していくことが必要。

4. インフラメンテナンス&マネジメントのためのオール土木学会のとりくみ検討会

メッセージを出し、それを考える会議体を作ることとした。まずは様々な課題をテーブルに並べて可視化し、優先して取り組む事項があれば実践的な活動体制を立ち上げる。多面的な観点から議論する会議体のデザインにもチャレンジしていく。既存委員会を巻き込みなが

ら意見交換できるコミュニティを作っていきたい。

5. 仕組みを変えること

次年度の理事の選考の方針において多様性を高めることを明言したものの、来年の理事に女性は選ばれなかった。理事の平均年齢は約 60 歳で、民間なら役員レベルといった暗黙の了解のようなものがある。そこに女性が一定数いる状態になるのは約 20 年後で、それを待ちますか？ということ。公益法が変わり、理事に外部の人を入れる必要がでてきたため、理事の定員を増やす動きがあり、そうした改訂のタイミングにあわせて女性枠の追加を検討する方向になっている。

土木学会は会員の「なにかやりたい」「可能にする」インフラで、気持ちをときほぐし、気づききっかけをつくり、気分と雰囲気を変えることを目指してきたが、これだけでは駄目で、仕組みを変えることが必要だとわかってきた。仕組みを変えることで雰囲気が変わるし、雰囲気が変わらないと仕組みは変わらない。この循環をいかにやっていくか、学会をサステナブルにしていくには仕組みを変えることが必要。人が減り、若い人が入らなくなっている中で法人活動をどうしていくか、学会活動は今のままでいいのかと改めて考えるようになった。

自由な議論が一番大事で、積み重ね・諦めない・ねばり強く・前向き・楽観的に、ときどき休みながら、来るものは拒まず、去るものは追わず。学会が楽しいものになり、自分の居場所を見つけたり、自分自身の仕事の幅を広げたりすることは、仕事として取り組むプロジェクトの進め方に違う人の意見を取り入れてチャレンジする際の模擬的な体験ともなり得るので、学会の中でやっていくことが大事ではないかと思う。

(4) 質疑応答

Q1：女性に限らず若い人が学会活動をやってくれない。小さい会社だと活動しにくい。若い人たちに活動してもらうために何かやっているか。

A1：土木学会のマジョリティは年配の人で、土木出身の人が多い。学会の 5 か年計画が改定の時期になっており JCE2025 として公表されるが、そこで学会自体をどうしていくかをテーマに掲げ、色んな人が活躍できるように考えていこうとしている。若い人はメリットがないと来ない。学会に行けば違う人とのつながりが持てると思えるそういう機会を増やしたい。



古賀沙織 委員（司会）

Q2：土木学会の会長が一年で変わるのは何故か。不思議に思っていた。

A2：土木学会は次期会長、会長、前会長という立場で何となく 3 年関わるができるが、特定のカラーが出ないようにしているのではないか。

Q3：（土木学会誌から感じとれた？）佐々木イズムを継続していただきたい。

A3：実は学会誌の特集に会長は何ら関わっていない。土木と建築の融合が特集されたのは全くの偶然。何回か掲載した「会長からのメッセージ」では私の考えてきたことを述べた。雰囲気の継続は難しいと思うが、次の形が生まれてくれれば良いと思う。

Q4：気持ちのときほぐしという言葉があった。意識されたのはいつからか。

A4：私自身は学会活動においても立場を気にして発言することなかったし、景観デザインの分野なので、橋や川、港など色んな人と話をする。地域住民の方ともダイレクトに話をする。そのため違う分野の人と話す時、構えたり、立場がこうだからということはない。一方、土木学会の中ではかなりこういう感覚は特殊だということに気づいた。若い人は思っても言えないことを抱えている人が多いと思う。何とかしなければと次期会長の時から思っていた。楽しさをより広げていきたい。

Q5：原子力の学会にいる。若い人の参加が少ない。若い人がマイノリティになっている。若い人はアウトカム教育を受けており、目的意識がはっきりしている。忙しい時に楽しいだけで参加してくれるのか。自分が成長できる、他からも評価してもらえる、明確なメリットがないと参加してもらえない。若い人は発想がおもしろい人が多いがなかなか活かされない。どうすれば若い人が定着するのか。

A5：若い人は楽しいだけでは来ない。若い人は子育て世代でもあり忙しい。働き方改革でこれ以上働いてはいけないという厳しい決まりもある。その中で自分が勉強したい、学会を使いたいというニーズはあると思う。学会は学べる場として提供できると思う。（土木学会に行っても）まともな話が聞けないのではなく、自分が加わることもできる場にできれば。上から降ってきたものを割り当てられるのではなく、異分野とも話せる場であることを PR していったらどうか。技術士会は色んな分野の人が集っている場。DEI を発信されたら一気に広まっていくと思う。

(5) 日本技術士会 DEI 推進宣言についての説明 D&I 小委員会 委員長 瀬尾弘美

日本技術士会では 2025 年 3 月に DEI 宣言を策定した。男女共同参画推進委員会の中に推進宣言の WG をつくり進めてきた。本会の使命、社会的動向、現状と課題をたくさん出し、会長にも加わっていただき議論を重ねて策定した。ダイバーシティ（多様な状態）は良いことだが、インクルージョン（包摂性）が大事。色んな人が関わりながら相乗効果で価値を発揮していくことが大事。D&I から DEI とした。E は公平の意。色んな条件のある人に同じ自転車を与えても乗れない人もいるし足が届かない人もいる。同じ自転車は平等なものを与えるということ。だが、Equity は個別の状況や環境を考慮しながらリソースを与えることで、自転車と言えば身障者でも子供でも前に進むことが出来ることが公平ということになる。なので、D&I ではなく DEI にした。技術士に占める女性は 10 年で 1% の伸びに留まっている。なぜ女性が少ないかというと、STEM（理工学系）に女子が少ないから。小学生の時は理科や算数が好きな女子が多くても、理系の女子はかっこ悪いという印象や親の偏見などで先細りになり、就職してもガラスの天井があり、科学技術の中で女性が活躍できる場がないことも、DEI 推進宣言に至った背景の一つ。学協会で技術士の女性の割合は約 3% で土木学会とほぼ同じ。



瀬尾弘美 D&I 小委員長

日本技術士会の目指す姿として、多様・多彩な技術者、技術をつなぐプラットフォームとして、誰もが能力を発揮し、誰もがその人らしく生きられる社会の実現に貢献することが我々の姿だと位置づけた。

DEI すなわち多様性、公平性、包摂性の推進により、全ての技術士が活躍し、社会課題の解決やウェルビーイングの向上に貢献することを宣言した（趣旨は DEI 推進宣言のとおり）。

基本方針として「意識の深化～DEI 風土・文化の醸成～」 「仕組みの進化～多様な技術士の活躍～」 「社会貢献で真価～多様な技術による社会課題解決～」を示し、今後の取り組みの方向性についても紹介した。

(6) グループディスカッション・グループ発表

3～5 人のグループに分かれ、自己紹介、役割決め（進行、書記、タイムキーパー）の後、①印象に残ったこと、②自分がこれからしようと思うことについてグループディスカッションを行った。

佐々木先生の「仕組みを変えること」や講演後の質疑応答を受け、若い人が学会に入らなくなっていることが印象に残っている人が多かった。これからしたいことについても（マイノリティと言える）若い人が活動のメリットを感じ、活動に参加してもらうために、交流の場を作りたいとか、多様性を尊重したいという意見が多く見られた。

・講師コメント

一つの言葉から向こう側に広がるイメージをどれだけ豊かにしていけるかに気を付けてきた。それを（土木学会に）活かせたのかなと思う。仕組みを組み上げる確かさや再現性も大事。それを、より活かすために違うアプローチを行う役に立てればと思う。

世の中の変化の度合い、世代間、格差、体験しているものが違う色んな人と集まって話しているつもりでも、テーブルに着けていない人もいる。土木学会の中でもダイバーシティは世界にくらべればまだまだ。体験して気づいたことが次に展開できれば良い。

皆さんのコメントもありがたい。近いけど少し違う人と話すことは大事。他学会の皆さんと話せたのは勉強になった。日本技術士会は違う専門の分野の人が集まっているので DEI の宣言を出されれば広がっていくと期待している。

(7) 閉会挨拶 男女共同参画推進委員会副委員長 小牛田 尋志

組織に入るメリットという話があったが、今日の場に参加することが意義になったと思う。参加して良かったと思える場を増やしたい。クリエイティブデモクラシーの私たちの生活は私たちが変えたいことで変わると書かれていてそのとおり自分たちが変えるという当事者意識を持って雰囲気を変えていくことが重要だと講演、ディスカッションを聞いて思った。



トランプ政権が誕生してダイバーシティに逆風が吹いている 小牛田尋志 理事・副委員長
状況。日本のジェンダーギャップ指数は146カ国中118位と低いところにある。ダイバーシティは始まってもない状況。アメリカの様に進んでいるところは逆風と言えるが、日本は始まってもない。もっと **Equity** の機会を色んな人に与えていく必要がある。帰属意識を持つことによって機会を組織の中に根付かせることが大事。

組織の雰囲気を変えて新しい仕組みをつくるところで活躍いただきたい。

(8)アンケート結果

- ・終了後のアンケートでは 69 名から回答があり、うち 7 割が男性であった。
- ・発表への満足度は高く、約 87%が「満足」又は「やや満足」であり「やや不満」は一件あったものの「不満」はなかった。
- ・講演の内容で印象に残ったこととして「佐々木会長の講演から、短期間でも目標と問題意識があれば、これだけ素晴らしい取組ができるということを実感させていただいた」「改革をするには、仕組みも変える必要があること。女性会長の誕生の翌期に、女性役員がいらないとの現実を聞き、DEI の推進の必要性を痛感した」などがあった。
- ・当委員会への期待としては、「日本技術士会の DEI の象徴として期待しています」「DEI や男女共同参画が当たり前の時代になるように更なる取り組みを期待したい」などがあり、本 DEI フォーラムの意義の大きさが改めて確認できた。一方、「子育て中の女性技術者が受験を諦めずにすむ環境を作って欲しい」「非会員は会場参加だけだったので、お子さんが小さくて会場に来ることができず、ガッカリしている女性がいた」など、子育て中の女性に配慮した受験の環境づくりや行事運営を期待する声があった。

以上



佐々木講師を囲んで

【記録作成】

北浦直子・小林裕典